

1

　冷たい雨が降りしきる新宿の摩天楼の谷間で、セラフィモンとラジエルモンが静かに向き合っていた。
　やはり生きていたか…仮面の下から響いたセラフィモンの低く荘厳な声が、ラジエルモンの電脳核の奥底に眠っていた古い記憶の蓋をこじ開ける。
　かつて、すべてのデジタルワールドの中枢であるカーネルの傍らで、理想郷を作るという名目の下に、同じ人型の高貴な姿を持たず、混沌と穢れの象徴である『獣』の因子を宿しているというただ一点の理由で、セラフィモンとオファニモンによって光の高みから突き落とされ、次元の狭間へと追放されたあの日の記憶が、焼けるような憎悪とともに蘇った。
　だが、そのどす黒い怒りの記憶のすぐ隣には、いつも決まって、もう一人の友の顔が浮かび上がってくる。
　同じ獣型の三大天使として人型の上位天使たちから陰で蔑まれ、心ない差別と迫害の矢面に立たされながらも、決して牙を剥いて全てを呪う道を選ばなかったケルビモンの、あの困ったように目を細める穏やかな笑顔だった。
（貴方の顔を…そのヘラついた困ったような顔を思い出すと腹が立つ。）
　どれほど理不尽な譲歩を強いられても、あの子は天使と獣が手を取り合って共に生きられる未来を最後まで捨てなかった。
　ラジエルモンにとって、その無垢なほど真っ直ぐな笑顔は、思い出すたびに胸がざわつくほど腹立たしいものだった。あの笑顔が脳裏にちらつくせいで、自分はすべてを焼き尽くす純粋な復讐鬼になりきることができず、いつも迷い、立ち止まってしまった。
　そして、傷ついた身体で現実世界へと逃げ延び、『安所』という名の人間の女性として防衛省の片隅に身を潜めていた日々。
　最初はただ、セラフィモンたちの計画を阻み、一矢報いるための足場に過ぎなかったはずの人間社会。
　けれど、狭い執務室で熱いコーヒーを差し出してくれた部下たちの不器用な気遣いや、恐怖に震えながらも家族や見知らぬ市民を守るために銃を握る自衛隊員たちの背中、彼女の中の氷はいつの間にか溶かされていた。
（貴方の所為で全てを投げ出す事も出来ずにここにいる…！）
「…急げ！ 竜崎さんたちを装甲車の陰へ運べッ！」
　背後から聞こえてくる、泥と雨にまみれた部下たちの懸命な掛け声と足音が、ラジエルモンの意識を過去の回想から現在の冷たい雨音の中へと引き戻した。
　ラジエルモンは小さく息を吐き出し、あの日のケルビモンが浮かべていたような、すべてを受け入れる穏やかな微笑みを唇に刻もうとした。
　しかし、不器用な彼女の口元に浮かんだのは、友への想いと、目の前の独裁者に対する抑えきれない怒りが混ざり合った、ひどく獰猛で人間臭い笑みだった。
「それが…その感情が貴方を獣たらしめているのですよラジエルモン。」
　獣の耳がピクリと跳ね、十枚の翼が雨粒を弾き飛ばして閃く。
ラジエルモンは背後の人間たちを振り返ることなく、大気を踏み砕いてセラフィモンの懐へと真っ直ぐに踏み込んだ



2

ラジエルモンがセラフィモンの正面へと躍り出たその瞬間を逃さず、地上の自衛隊員たちは崩落した TEZ 東京教会ビル跡地の縁へと駆け込み、倒れていた電脳犯罪捜査課の面々を次々と担ぎ上げた。

瓦礫へ引きずり込まれた紋十郎と三匹のガブモンたちの首元では、制御装置の狙撃によって強制構築を中断させられた白いコンセクレイションリングが、接触不良を起こした蛍光灯のように不規則な明滅を繰り返していた。

神経へ食い込みかけた光の楔の余波で、頭蓋の奥が割れるように痛む。だが、笠水の左腕に巻かれたバイタルブレスが力強い鼓動の光を放ち、外部からの精神干渉を必死に押し返していた。

砕けたパワードスーツの隙間から血を滲ませながら、竜崎もまた、自らのデジヴァイスの光を支えに意識の輪郭を繋ぎ止めた。すぐ脇では、魔力を使い果たしたアヌビモンが、未だ意識の戻らないデジマルを自衛隊員の担架へと慎重に預けている。デジマルの首輪に取り付けられたデジヴァイスもまた、微かな光を灯して主の脳髄を白い首輪の侵食から守っていた。

「報告します！ 靖国通りから南側のルートはビル崩落と放置車両で完全に塞がっています！ 重傷者を乗せた輸送車は北東の抜弁天方面へ回し、戦闘可能な車両は別ルートで四谷方面へ迂回させます！」

小隊長と思しき自衛隊員が、雨に濡れた地図端末を示しながら簡潔に状況を伝えた。紋十郎は脂汗を拭い、上空で激突を開始した二つの黄金の影を見上げて短く吐き捨てた。

「…頼んます。俺らはまだ…。」

ラジエルモンがセラフィモンの懐へ肉薄し、先ほどまで渾天儀の制御リングを維持していたセラフィモンの右腕を狙って、高速の魔力打撃を畳み掛けていた。

一撃、二撃、三撃。大気を穿つ爪と魔導器の連撃が嵐のように降り注ぐ。

しかし、セラフィモンは一歩も後退しなかった。

十枚の翼を最小限に揺らし、上体の角度をほんの数 cm 傾け、白銀の小手だけでラジエルモンの連撃をすべて正確に受け流していく。過剰な力みはどこにもなく、ただ絶対的な技量と出力の差だけで暴風をいなしていた。

ラジエルモンは深追いせず、一度大きく後方へと跳び退いて距離を取ると、黄金の双眸に千里眼の演算光を宿して周囲一帯の街区を走査した。

眼下の路地や大通りには、まだサポタマによるリングが形成されていない生存者たちを避難誘導する警察官や自衛隊員、そして逃げ惑う市民たちの姿が数多く残っている。このままこの空域で究極体同士の広域技を撃ち合えば、余波だけで彼らが全滅することは避けられない。

ラジエルモンは意図的にセラフィモンの頭上を掠める角度で魔力弾を連射し、自らの身体を西新宿の高層ビル群が林立する高い空域へと滑らせた。

セラフィモンは音もなく翼を広げ、その背中を正確に追尾してくる。

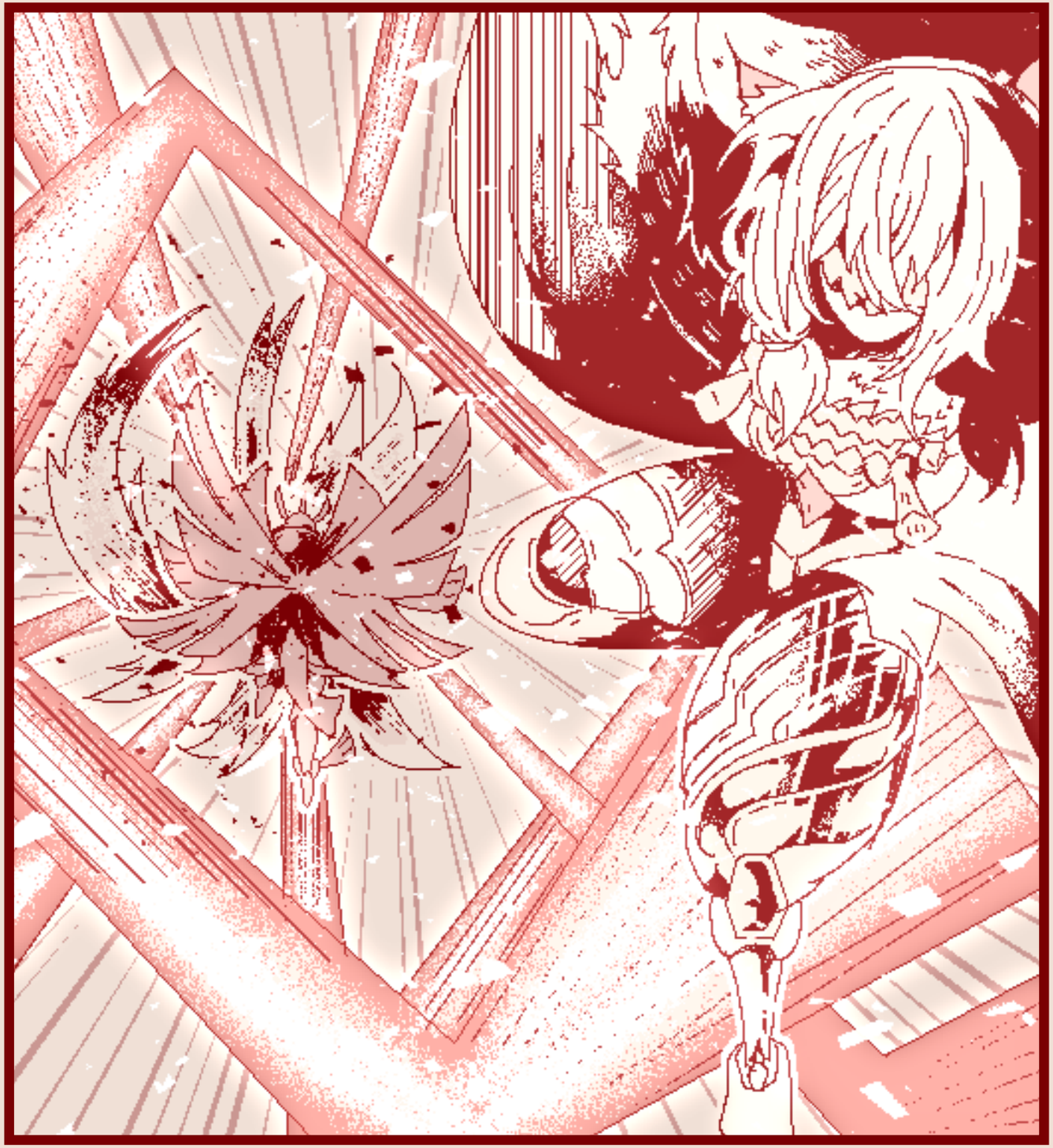
ラジエルモンが地上の人間に気を取られて視線を落とすたび、そのわずかな隙を突くように鋭い光弾を撃ち込み、彼女が救援へ戻る選択肢を冷酷に削り取っていく。

二体の究極体は、雨雲の垂れ込める西新宿の超高層ビル街へと突入した。

整然と並ぶガラス張りの摩天楼の窓面に、黄金と深緑の二つの残像が一瞬だけ映り込み、それから一拍遅れて、通過した衝撃波によって何百枚もの強化ガラスが外側へと一斉に爆ぜ割れた。

ラジエルモンは巨大なオフィスビルの鋭角なコーナーを掠めるように急旋回し、死角からセラフィモンの背後へ回り込もうと加速する。

だが、セラフィモンはビルの角を追って回るような無駄な機動は取らなかった。ラジエルモンがコーナーの向こう側から飛び出してくる未来の座標を、最初から完全に読み切っていたかのように、ただ静かにその場へ先回りして右腕を突き出していたのだ。



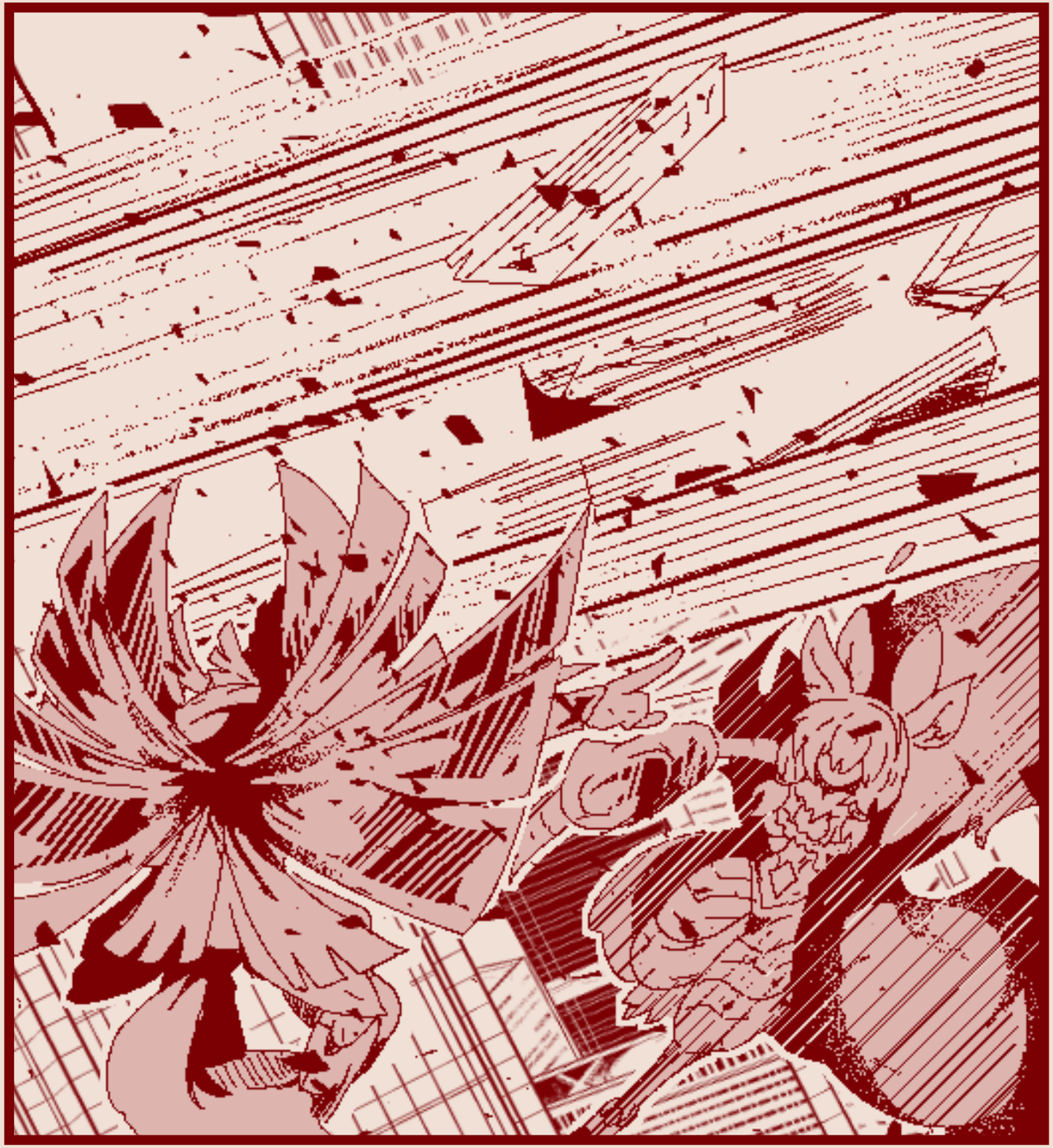
3

「――っ！」
　ラジエルモンは空中で強引に十枚の翼を逆噴射させ、真上へと急上昇してその拳を紙一重でかわした。
　直後、空振ったセラフィモンの拳圧だけで高層ビルの角の外壁がごっそりと抉り取られ、砕けたコンクリートと窓枠、オフィス内のデスクや書類の束が濁流となって空中へと吸い出された。
　上昇したラジエルモンは体勢を反転させ、突き出されたセラフィモンの肩口めがけて高空から強烈な踵落としを叩き込む。セラフィモンが掲げた左腕とラジエルモンの脚が交差し、空中で凄まじい金属音と火花が弾けた。
　反動で双方が弾き飛ばされる。だが、セラフィモンがわずか数メートル滑っただけでピタリと空中に静止したのに対し、ラジエルモンは衝撃を殺しきれず、ビルの壁面を蹴りながら大きく姿勢を立て直さなければならなかった。
　はるか眼下の地上では、数秒遅れて空から降り注いできた大量のガラス片と外壁の破片がアスファルトへ激突していた。
　中空で体勢を整えたラジエルモンの両腕の魔導器に、幾重もの幾何学的な魔方陣が展開された。
　ノウレッジストリームを、セラフィモンの胸元めがけて一直線に解き放った。
　極彩色の光の奔流が空間を焼きながら直進する。
　セラフィモンはわずかに身体を横へと滑らせてその初撃をかわした。ラジエルモンは即座に両腕の角度を振り、逃げるセラフィモンを薙ぎ払うように放射の軌道を追従させる。
　高層ビルと高層ビルの狭い谷間を、極彩色の光の流れが斜め上へと切り裂いていく。
　軌道上の氷雨が瞬時に蒸発し、鉛色の空にくっきりとした白い蒸気の筋が刻まれた。
　しかし、セラフィモンは光の奔流の外側を円を描くように飛翔し、ラジエルモンが軌道を振り切って両腕がわずかに伸びきったその刹那の硬直へと、音もなく滑り込んできた。
　セラフィモンが容赦なく放った追撃の光弾に対し、ラジエルモンは両腕の魔方陣を最大展開し、真横からエネルギーの塊をぶつけて軌道をねじ曲げた。
光弾は橋のすぐ脇の空中で炸裂し、熱い爆風と川の水しぶきが雨に混じって降り注ぐ。その水幕に守られるようにして、橋の上の退避車両が全速力で対岸へと走り抜けていった。
　水煙の向こうで、セラフィモンが冷ややかな視線をラジエルモンへと向けた。
「…愚か…人間に目を配るたび、お前の手は遅れ、防御には綻びが生まれていますよ。
　ラジエルモン。
　ケルビモンもそうですか、目の前の小事にばかり気を取られ結局大事をなせず状況を悪くしていく。
　私はね…そんな貴方達にほとほと愛想を尽かしたんですよ。」
　その静かな指摘に答える余裕すら、今のラジエルモンには残されていなかった。
　その頃、ラジエルモンが北西の空域を引き回している隙を突き、数台の自衛隊高機動車と警察の装甲車両が、崩落した瓦礫の道を縫うようにして東の四谷方面へと別経路で先行していた。
揺れる車内から、同行する通信兵が「靖国通り一部開通、後続の避難バスはこの轍を通れ！」と逐一安全なルートを後方へと送信し続けている。
　荷台では、荒い息を吐くアグモンと三匹のガブモンたちが、濡れた毛皮と鱗を震わせながら懸命に呼吸を整えていた。先ほどのセラフィモン戦で負った深い裂傷や打撲の痛みは消えておらず、車体が揺れるたびに足元がふらつく。



4

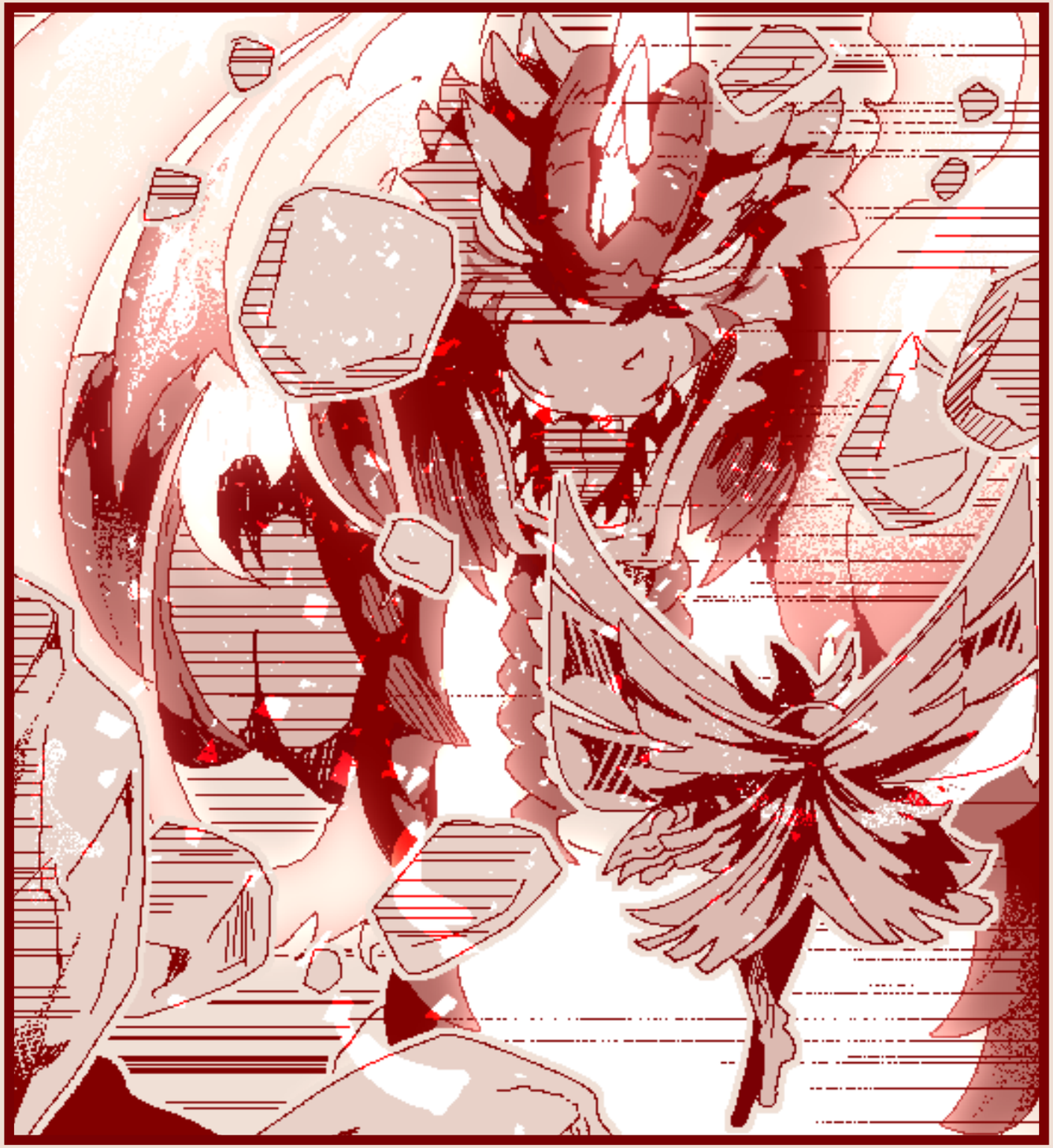
　紋十郎はバイタルブレスの数値を睨み、厳しい顔で三匹のガブモンを見渡した。
「…いいか、よく聞け。今の俺のデジソウルと、お前らの残ってる体力を全部かき集めても、三匹同時に究極体へ戻すのは絶対に無理だ。…一度に戦えない…役割を分ける。」
　ガブモンが達悔しそうに唇を噛んだが、すぐに自分の脚の震えを見て頷いた。
　向かいの座席では、竜崎もまたアグモンの頭を大きな手で撫でながら、低い声で伝えていた。
「アグモン、最初からダイナモンにはなれない。まずは完全体のマスターティラノモンで戦線に割り込み、本当に必要な一度きりの瞬間だけ、すべての力をダイナモンへ注ぎ込むぞ」
「…任せとけ、きっちりリベンジしててるよ。」
　車両が四谷の開けた交差点付近へと滑り込み、ブレーキ音を立てて停止する。
　後部ハッチが開くと、アヌビモンが黄金の杖を地面に突き立て、それを支えにするようにしてゆっくりと降り立った。
　先行していた自衛隊員たちが周囲の半壊したビル群を素早く確認し、「北東側の廃ビル二棟、内部に生存者なし！ あそこなら射線として使えます！」と砲撃陣地の座標を決定した。
　まさにその直後だった。
　高田馬場から早稲田、神楽坂方面の空域をジグザグに駆け抜け、市民の避難時間を稼ぎ続けてきたラジエルモンとセラフィモンの二つの光が、雲を引き裂いて市ヶ谷・四谷方面の上空へと突入してきた。
　ラジエルモンは最後の賭けに出るように急加速し、セラフィモンの背後を取ろうと空中で鋭く旋回する。
　だが、連戦の疲労と左肩の負傷によって、十枚の翼の羽ばたきが、ほんのコンマ一秒だけ遅れた。
　旋回するラジエルモンの正面へ、セラフィモンが音もなく向き直る。
　防御の魔方陣を展開するよりも速く、セラフィモンの白銀の右拳がラジエルモンの腹部へと深々とめり込み、肺の中の空気と魔力を一気に吐き出させた。
「…ふっ！」
　くの字に折れ曲がったラジエルモンの背中へ、間髪入れずセラフィモンの無慈悲な回し蹴りが叩き込まれる。
　砲弾のように真下へと撃ち落とされたラジエルモンの身体は、隊員たちが無人を
　確認したばかりの中層オフィスビルの屋上を突き破り、さらに三階層分の床スラブを次々と削り砕きながら、凄まじい粉塵を巻き上げてビル内部で停止した。
　数秒遅れて、鼓膜を破るような崩壊音が四谷一帯に轟き、ビルの高層部が黒煙を噴き上げる光景は遠く離れた新宿の各街区からもはっきりと視界に捉えられた。
　粉塵の舞うビルの破孔へ向けて、セラフィモンがトドメを刺すべく静かに高度を下げてくる。
「今だ、行けェッ!!」
　地上で待ち構えていた紋十郎と竜崎が、同時にデジヴァイスを高く掲げた。
　進化の光が雨の街路を照らし出す。アグモンの身体が完全体・マスターティラノモンへと膨張し、ガブモンの一匹が完全体・ワーガルルモンへと一気に跳躍進化を遂げた。
「おおおおおらァッ!!」
　瓦礫を蹴って垂直に跳び上がったワーガルルモンが、降下してくるセラフィモンの真横から死角を突いて飛び込み、低い姿勢から鋭利な鉤爪を振り上げてセラフィモンの右腕を外側へと強引に弾き飛ばした。
　さらにその反対側から、ビルの外壁を踏み砕いて駆け上がったマスターティラノモンの巨体が迫り、鋼をも噛み砕く巨大な顎と太い前肢を広げて、セラフィモンの降下進路を完全に塞ぎ込んだ。
　二体の完全体による捨て身の同時挟撃。それが、瓦礫の底のラジエルモンが息を吹き返すための、貴い数秒の空白を作り出した。
しかし、セラフィモンの仮面の下の瞳は、微塵も揺らがなかった。
セラフィモンは迫り来るマスターティラノモンの鼻先へ左掌を軽く添えると、その突進の運動エネルギーをそのまま利用して巨体の頭部を横へと滑らせ、反対側から踏み込んできたワーガルルモンの進路上へとマスターティラノモンの巨体を押しやったのだ。



5

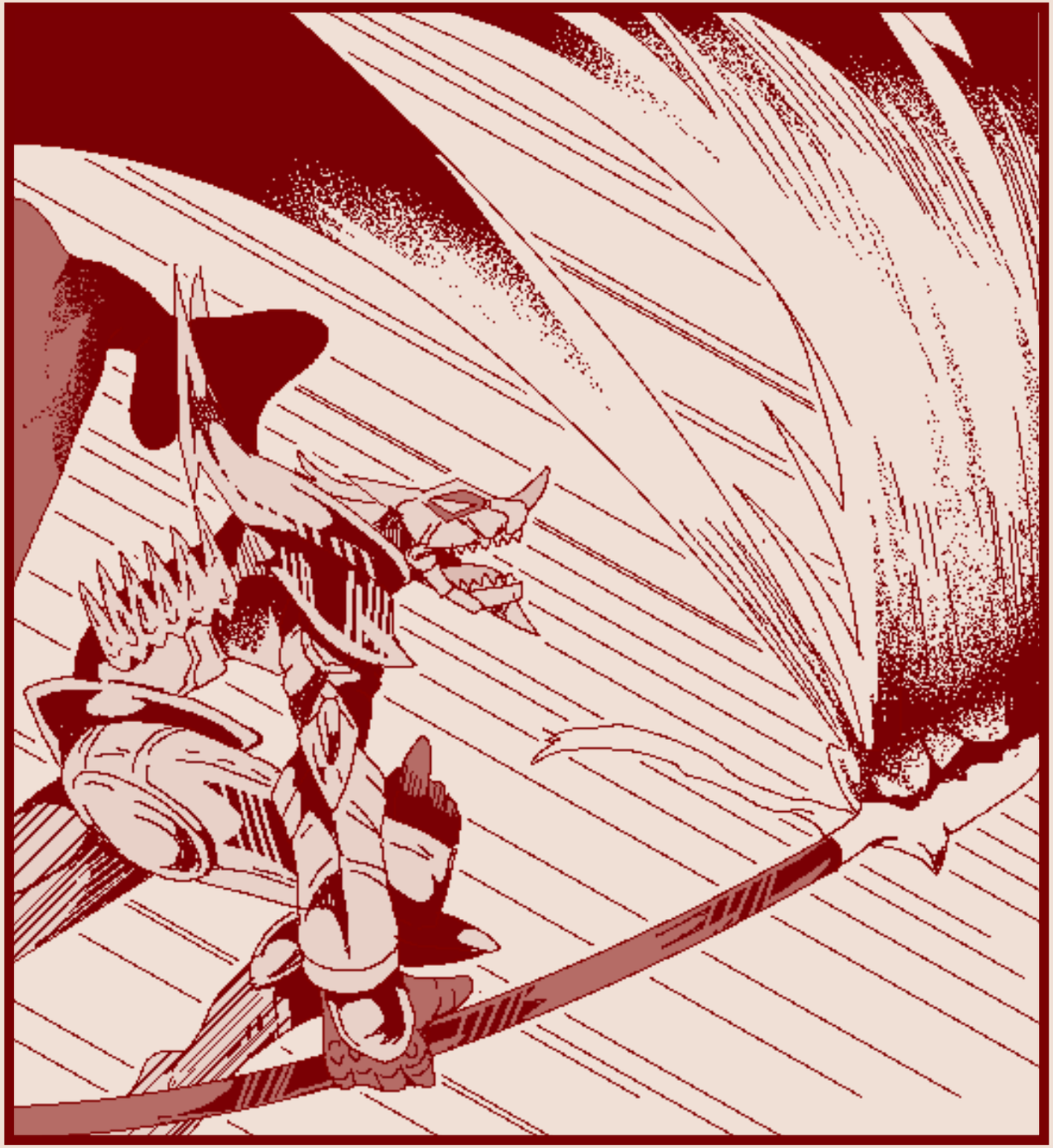
「なっ!?しまっ…!?」
　味方同士の正面衝突を避けるため、ワーガルルモンが空中で強引に身体を捻って軌道を緩めた、まさにその瞬間。
　マスターティラノモンの陰からすっと伸びてきたセラフィモンの右拳と左脚が、二体の完全体の腹部をほぼ同時に、正確無比に打ち抜いた。
　ワーガルルモンとマスターティラノモンの身体が左右の別方向へと勢いよく吹き飛ばされ、眼下の路上に並んでいた無人の放置車両や崩れたビルの外壁をまとめて押し潰しながら転がった。
　二体を一蹴したセラフィモンは、一度たりとも汚れた地面へ足を下ろすことなく、中空で優雅に姿勢を整え、瓦礫の奥から立ち上がろうとするラジエルモンの姿を静かに見下ろした。

　崩れ落ちたオフィスビルの中層階から瓦礫を跳ね除け、ラジエルモンが再び雨空へと飛び出した。
　血の滲む唇を噛み締め、中空に佇むセラフィモンへ向けて正面から突撃を仕掛ける。
　対するセラフィモンは、わずかに上げた右手の人差し指を、水平にすっと横へ滑らせた。
　極細の光の筋が空間を走り、迫り来るラジエルモンの頬を掠めて、そのはるか背後に聳える複合ビルの外壁へと一直線に伸びていく。
　直後には何も起きなかった。だが、ラジエルモンが光の筋を潜り抜けた一拍後、背後にある複合ビルの同じ高さの階層に、刃物で断ち切ったような真一文字の亀裂が走り、窓枠が歪む嫌な金属音とともにビルの巨大な上部構造がゆっくりと道路側へ傾き始めたのだ。
「――っ!?」
　ラジエルモンの視界が、目の前のセラフィモンと、背後で崩落し始めた数千トンのビル外壁との間で引き裂かれる。そのまま放置すれば、下の道路で撤退作業を続けている隊員や車両が瓦礫の下敷きになる。
　ラジエルモンは攻撃に使うはずだった両腕の魔方陣を瞬時に背面へと回し、崩れ落ちる巨大なコンクリート塊を強引に空中で粉砕・押し上げた。
「下の道路を閉鎖して！ 破片が落ちます！」
　叫んだ、まさにその瞬間だった。
　防御も迎撃も外れたラジエルモンの無防備な懐へと、セラフィモンの白銀の影がすでに滑り込んでいた。
　大きく振りかぶらない、最小限の軌道から繰り出される重い拳の連打が、ラジエルモンの胸元と脇腹へ正確無比に叩き込まれる。
「が、はっ…!!」
　内臓と電脳核を直接揺さぶる衝撃に、ラジエルモンの両腕から魔方陣の光が砕け散り、その身体が近くの雑居ビルの屋上へと激しく叩きつけられた。
　ひび割れた屋上のコンクリートに倒れ伏すラジエルモンを見下ろし、セラフィモンは静かに言った。
「…言ったはずです。自らその身を削り、敗北への歩みを早めているに過ぎない…だのに、ケルビモンも貴方も何も聞かない…何も学ぼうとしない。何も変えない。
　セラフィモンの右手に、倒れたラジエルモンを貫くための光が収束し始める。
（…完全体のままじゃ、次の一撃には間に合わねえ……！）



6

　地上の車両の山から起き上がったマスターティラノモンが、その圧倒的な力量差を肌で悟り、背後の竜崎へと視線を投げた。
　言葉はいらなかった。竜崎は血の滲む拳で自らの胸を強く叩き、限界寸前のデジソウルをすべてデジヴァイス iC へとチャージして叫んだ。
「頼むぞ、アグモン！最後だ!!全部乗せろォッ!!」
　眩い進化の炎が噴き上がり、マスターティラノモンの巨体が再び竜人型の究極体ダイナモンへと変貌を遂げる。
　だが、再構築された重厚な装甲の随所には、先ほどの敗北で刻まれた深い亀裂がそのまま残り、継ぎ目からは最初から過剰な蒸気と火花が噴き出していた。
　それでもダイナモンは迷わず跳躍し、ラジエルモンとセラフィモンの間を隔てる雑居ビルの残存外壁を、自らの巨体で内側から豪快に突き破った。
「おおおおおおおおっ!! バーニングエンドォッ!!」
　飛び散るコンクリートの破片と粉塵を押しのけ、至近距離の死角から、ダイナモンの左拳に宿った灼熱の火球がセラフィモンの脇腹めがけて突き出される。
　しかし、セラフィモンは炎の熱風の中でわずかに半身を捻った。
突き出されたダイナモンの左腕に自らの両手を添えるようにして受け止めると、正面から押し返すのではなく、ダイナモン自身の突進の勢いをそのまま利用して腕を斜め前方へと引き込み、巨体のベクトルを横へと綺麗に流し去ったのだ。
「なっ！う、おおおおっ!?」
重心を失ったダイナモンの身体が空中で大きく泳ぎ、そのまま隣接するビルの低層階へと頭から激突した。
　壁面が崩れ落ち、ダイナモンのひび割れた装甲の隙間から激しいスパークと黒煙が噴き上がる。
「ダイナモン！ 踏みとどまれ、立つんだッ！」
　地上から竜崎が必死に声を嗄らすが、瓦礫の中から身を起こしかけたダイナモンの右膝がガクリと折れ、その場に片膝をついた。無理な再進化の反動が、すでに彼の稼働限界を奪いつつあった。



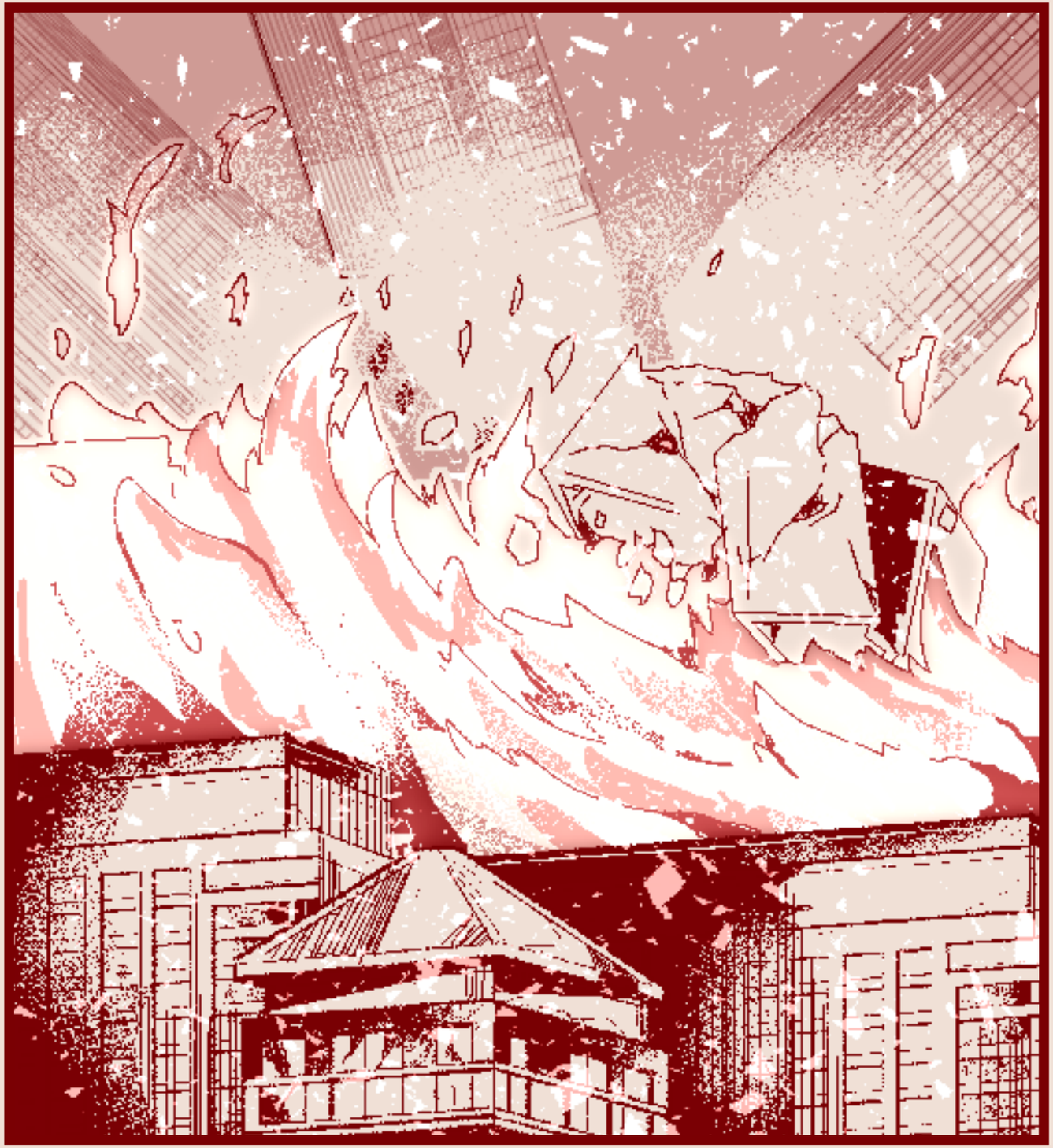
7

　ワーガルルモンがクーレスガルルモンへ進化し、ダイナモンを追うセラフィモンへ斬り込み、両腕の剣刃を閃かせて鋭い斬撃を浴びせた。
　セラフィモンが半歩後ろへ退いて初撃をかわす。だが、クーレスガルルモンは相手が退く先の空間をあらかじめ読んでいたかのように踏み込み、下段からの斬り上げ、さらに空中で身体を回転させての三撃目を、すべて異なる角度から休みなく重ねていった。
　凄まじい剣圧の余波だけでビルの屋上にある高架水槽や空調設備が豆腐のように真っ二つに断ち切られ、ひしゃげた鉄骨が雨の街路へと落下していく。
　だが、四撃目の大振りの刃へ繋ごうとクーレスガルルモンがわずかに肩を引いた、そのコンマ一秒の境目だった。
　後退していたはずのセラフィモンが、剣の間合いの外側へ逃げるのではなく、逆に一歩、クーレスガルルモンの懐のど真ん中へと深く踏み込んできたのだ。
「っ!?」
　剣を振り抜くための空間そのものを潰され、クーレスガルルモンの動きが詰まる。その無防備な腹部の装甲へ、セラフィモンの白銀の拳が寸分の狂いもなく直撃した。
　鈍い金属の破砕音が響き、クーレスガルルモンの強靭な身体がくの字に折れ曲がる。セラフィモンは拳を引き抜く動作と同時に左脚でその胸元を蹴り離し、吹き飛ばされたクーレスガルルモンは屋上のコンクリートを数十メートルにわたって削りながら仰向けに倒れ込んだ。
　地上でそれを見ていた紋十郎のバイタルブレスの画面が激しく明滅し、自身の口からも「ぐ、うっ！」と苦悶の吐息が漏れる。
　ダイナモンに続き、近接戦の要であるクーレスガルルモンまでがわずか数合で沈められた。
　紋十郎は一度言葉を詰まらせ、血の滲む唇を噛み締めてから、自分の隣でじっと出番を待っていた最後の相棒…砲撃担当として温存していた二匹目のガブモンへと視線を向けた。
　ガブモンは傷だらけの顔で笠水を見返し、迷いなく小さく頷いた。すべてを賭けた最後の射撃準備が始めた。



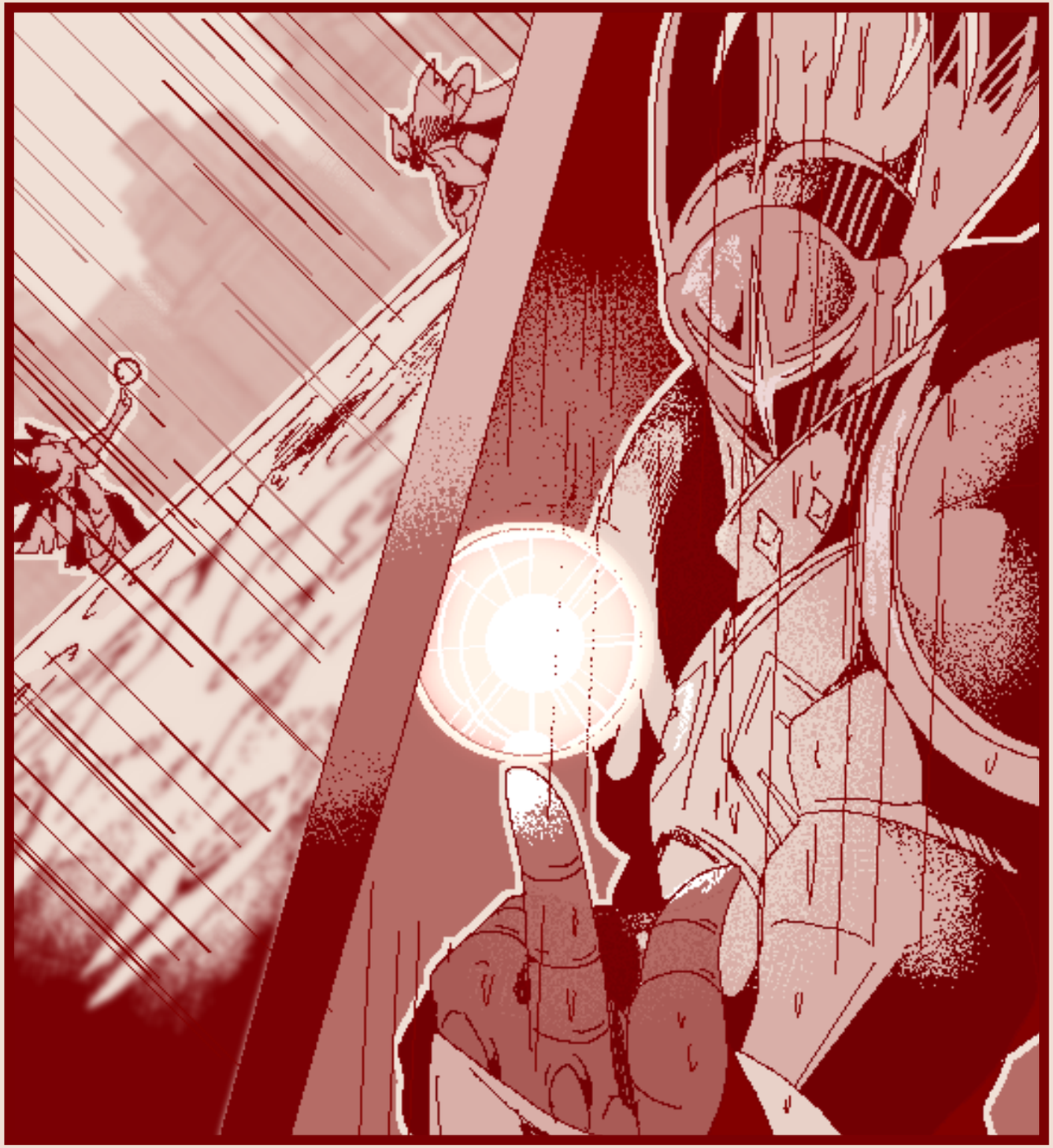
8

　クーレスガルルモンの背後の影から、黄金の杖を構えたアヌビモンが、残された最後の気力を振り絞って音もなく躍り出た。
「まだだ!!!セラフィモン！」
　アヌビモンは火力で勝負しようとはしなかった。
　魔力を失った黄金の杖を槍のように突き出し、最初の一撃でセラフィモンの右腕を下から上へと撥ね上げ、すかさず杖の石突を返してセラフィモンの足元の空間を横薙ぎに払った。
　セラフィモンはわずかに眉をひそめ、半歩ずつ後退しながらその杖の連撃をかわしていく。
　アヌビモンは決して深追いをしなかった。セラフィモンが半歩退けば、その退いた先の進路を塞ぐ位置へ正確に次の杖を置き、一歩ごとに少しずつ、しかし確実にセラフィモンの立ち位置を屋上の北東の端…先ほど隊員たちが確認した無人ビルの射線上へと誘導していく。
「…小賢しいですね。」
　自分が見えない檻へ誘導されていることに気づいたセラフィモンが、後退を止め、アヌビモンの杖を正面から踏み潰そうと前へ出た。
　だが、アヌビモンはそれを待っていた。
　踏み込んできたセラフィモンの腕に対し、アヌビモンは折れることを恐れず杖を斜めに突き上げ、自分の身体ごと相手の腕へ絡みつくようにして衝撃を受け止めた後、
　その反動を使って自ら後方へと弾け飛んだのだ。
その最後の受け流しによって、セラフィモンの足元が、ほんの一歩だけ後ろ…屋上の縁の特定座標へと滑り込んだ。
「今だ、アヌビモン！ 退けェッ!!」
　地上から響いた笠水の怒声を聞き届けると同時、アヌビモンは羽ばたく力すら残っていない身体を屋上の反対側へと投げ出すようにして転がり、射線から完全に離脱した。



9

笠水は、アヌビモンが退避し、射線上に人がいないことを確認してから、最後の砲撃担当として残していたガブモンへ合図を送った。
「撃て…今だッ!!」
進化の光が雨空を裂き、ズィードガルルモンへと変貌する。
負傷を抱えたズィードガルルモンは足場を固め、背部のズィード砲をセラフィモンの立つ廃ビル上部へ向けた。
紋十郎の号令とともに、超高密度の砲撃が雨と黒煙を切り裂き、人のいない建物の残骸ごとセラフィモンを包み込んだ。
直撃の瞬間、廃ビルの外壁が超重力に引かれたように一瞬だけ内側へとへこみ、次の刹那、耐えきれなくなったエネルギーが巨大な爆炎となって外側へと大爆発を起こした。ビルの残っていた上部構造が跡形もなく吹き飛び、夜空を思わせる暗い雨雲が昼間のように白く照らし出される。
その凄まじい閃光と轟音は、四谷から遠く離れた西新宿や落合、高田馬場の各街区からもはっきりと確認できた。
地上の紋十郎は荒い息を吐きながら黒煙の渦巻くビルの上部を見つめ、全力を撃ち尽くしたズィードガルルモンは砲身を下げきることもできずに巨体を小刻みに震わせていた。
だが、渦巻く黒煙と爆炎の中心に、まるで星座が灯るように、七つの眩い黄金の光球が静かに浮かび上がった。
「…なっ…!?」
紋十郎の顔から血の気が引く。
爆炎を内側から切り裂き、無傷のまま翼を広げたセラフィモンの声が、戦場全体に冷たく響き渡った。
「セブンヘブンズ」
放たれた七つの超熱光球が、緩やかな弧を描いて扇状に分散し、地上の味方陣営へ向けて一斉に降り注いだ。
避ける時間などない。先頭の第一球が、硬直していたズィードガルルモンの砲撃陣地へと真っ直ぐに届き、ズィード砲の装甲を粉々に砕きながらその巨体を交差点の向こう側まで吹き飛ばした。
続く第二、第三の光球が、立ち上がろうとしていたダイナモンとクーレスガルルモンの足元へとそれぞれ別々に着弾し、足場のビルごと大爆発を起こして二体を瓦礫の底へと沈める。
第四の光球が地上の指揮車両へ向かうのを見たアヌビモンは、咄嗟に周囲の自衛隊員たちを杖で突き飛ばして逃がし、自らの身体で余波を受けて激しく路面へと投げ出された。
そして、残る第五、第六、第七の三つの光球が、動けない負傷者たちと隊員の密集する一角へと迫ったその瞬間。
「させませんッ!!」
屋上から血を吐きながら跳び出したラジエルモンが、三つの光球の射線上へと自らの身体を割り込ませ、両腕から広域拡散させたノウレッジストリームを全力でぶつけた。
極彩色の奔流が第五の光球を真横から殴りつけて無人区画へと軌道を逸らし、第六の光球と空中で正面衝突して激しい対消滅の爆発を引き起こす。
しかし、傷ついたラジエルモンの出力では、最後の第七球までを完全に相殺しきることはできなかった。
「く、がああああっ!!」
防御の魔方陣を食い破った七つ目の光球の爆発と熱風に正面から押し潰され、ラジエルモンの身体は白煙を曳きながら地上のアスファルトへと激しく叩き落とされた。
燃え盛る炎と黒煙のカーテンを押し開き、セラフィモンがゆっくりと空から姿を現す。白銀と黄金の鎧の表面にわずかな黒い煤が付着しているだけで、その呼吸も、十枚の翼の羽ばたきも、最初からただの一度も乱れてはいなかった。



ラジエルモンは迎撃しようと傷ついた右腕を持ち上げた。だが、電脳核の損耗が激しく、魔導器に浮かび上がった緑の魔方陣はノイズ混じりに明滅して形を保つことができない。

セラフィモンの指先から、処刑の光が放たれようとした…まさにその刹那だった。

崩落した道路脇の瓦礫の陰から、複数の小銃と狙撃銃の乾いた銃声が一斉に轟いた。放たれた対デジモン用の徹甲弾の束が、雨の空間を縫い、セラフィモンの左手の人差し指…まさに発射寸前で臨界点まで圧縮されていた光の凝縮点へと、横合いから正確に撃ち込まれたのだ。

弾丸そのものにセラフィモンの装甲を貫く威力はない。だが、解放寸前の不安定な高密度エネルギーへ外部から物理的な衝撃が加わったことで、溜め込まれていた光そのものが制御を失い、セラフィモンの左手首を巻き込んで空中で激しく暴発した。

眩い閃光が弾け、セラフィモンの左腕が爆風で一度だけ大きく横へと跳ね上がる。放たれるはずだった一撃は軌道を外れ、無人の空へと霧散した。

「なぜ、戻ってきたのですか!?」

ラジエルモンは驚きに目を見開き、銃煙の上がる瓦礫の陰へと声を上げた。

そこから姿を現したのは、先ほど竜崎たちの後退を任せて下がらせたはずの、安所直属の自衛隊員たちだった。



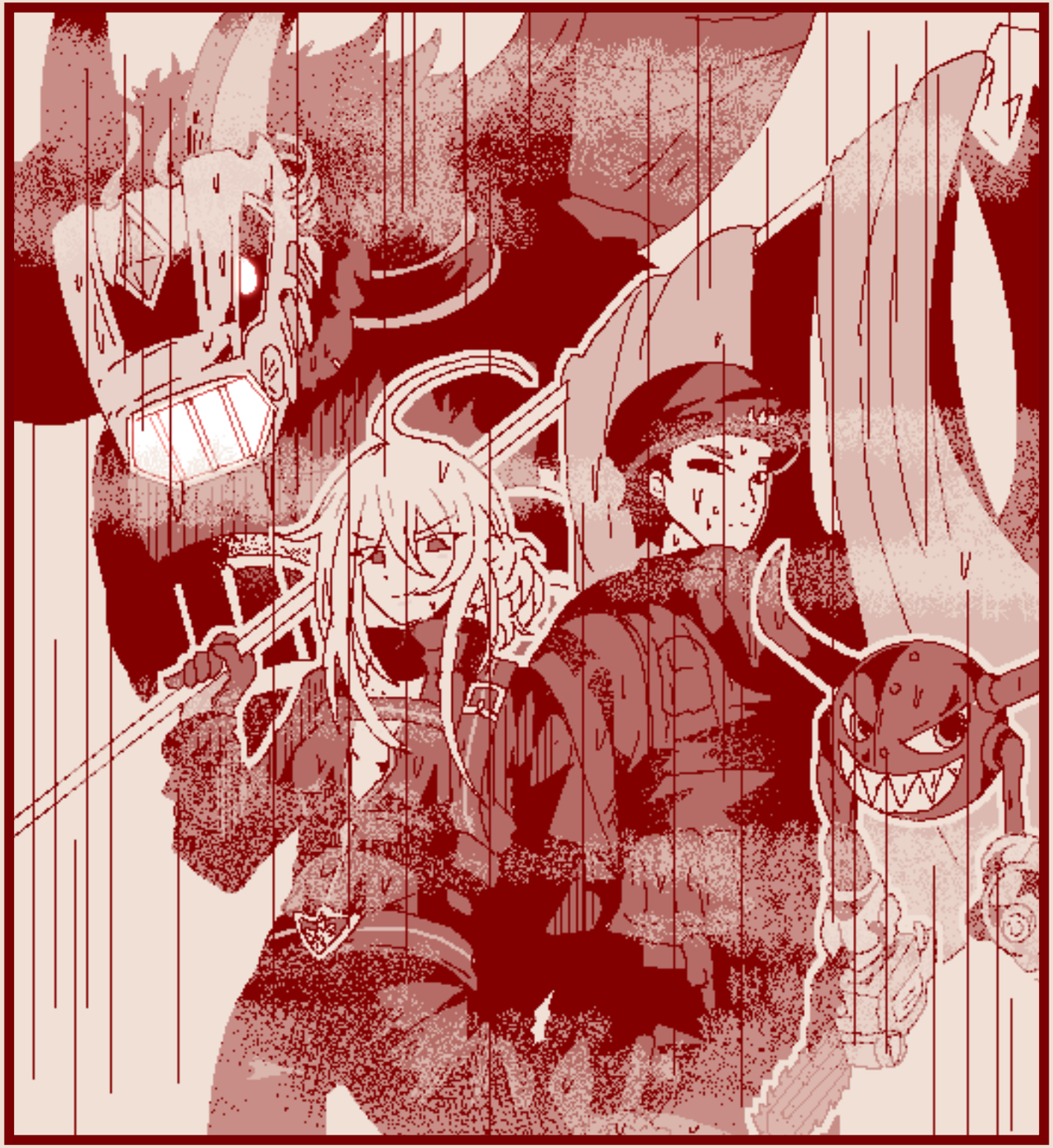
11

セラフィモンの問いかけが落ちた、まさにその時だった。
壁にもたれかかるラジエルモンの耳元の軍用無線機から、激しいノイズの隙間を縫って、
小銃を構えたまま息を切らす若い隊員が、ヘルメットの下の泥だらけの顔で真っ直ぐに叫び返す。
「負傷者の後方輸送班への引き継ぎは完了しました！
…それに、俺たちが隊長を一人だけ置いて逃げるわけないでしょう！」
ラジエルモンの胸が、大きく波打った。
自分はすでに人間の外皮を剥がされ、巨大な獣の耳と十枚の翼を持つ異形の怪物であるデジモンとしての本性を完全に晒している。それでもなお、目の前の部下たちは恐怖や疑念の目を向けることなく、彼女を安所という一人の人間の上官として呼び続けていた。
「あなたたち、私は…。」
何かを言おうとしたラジエルモンの喉の奥で、言葉が熱く詰まる。
隊員たちはその返答を待つことすらなく、即座に二班へと分かれた。一班がスモーク弾を焚いて倒れた笠水や竜崎たちの身体を瓦礫の陰へと引きずり込み、もう一班がラジエルモンの斜め後方に膝をついて援護射撃の銃口をセラフィモンへと向ける。
その一糸乱れぬ背中を見た瞬間、ラジエルモンの脳裏に、またしてもあの嫌いだったはずのケルビモンの穏やかな笑顔がよぎった。
（ああ、そうか…ケルビモン貴方が見ていたもの…これが。）
セラフィモンたちへの復讐の機会を窺うためだけに始めたはずの、人間としての偽りの生活。けれど、彼らと同じ屋根の下で働き、言葉を交わし、背中を預け合ってきた時間が、いつの間にか自分の中に命を懸けてでも守りたい居場所を作っていたのだ。
人間とデジモンのその不合理な連帯を、セラフィモンはひどく冷めた、無機質な目で見つめていた。
セラフィモンは暴発した左手を静かに開き、白銀の籠手に付着した黒い煤を払うように一度だけ手首を振った。
「…愚か。」
短い吐息とともに、セラフィモンが隊員たちの陣地へ向けて無造作に片腕を薙ぎ払った。
ただそれだけの動作で、暴風のような衝撃波が路面を抉りながら直進する。
「伏せろォッ!!」
ラジエルモンは悲鳴に近い声を上げて横合いへ飛び込み、吹き飛ばされた数人の隊員たちの上へと覆い被さるようにして、降り注ぐ巨大なコンクリートの破片を自らの背中と翼で受け止めた。
小銃が宙を舞い、衝撃波に巻き込まれた隊員たちの身体が瓦礫の上へと叩きつけられて、援護の銃声がピタリと途切れる。
さらに、部下を庇って無防備になったラジエルモンの背中へ、セラフィモンの容赦ない追撃の拳が打ち込まれた。
ラジエルモンの身体が弾き飛ばされ、背後にあった雑居ビルの分厚いコンクリート壁へ深くめり込むように激突した。
幸いにも、ラジエルモンが身を挺して衝撃を吸収したことで、投げ出された隊員たちは即死は免れた
壁の深い亀裂に傷だらけの身体を預け、口元から赤い血の混じった息を吐き出すラジエルモンの前へ、セラフィモンが静かに歩み寄った。
「…私には絶対に勝てないと分かっていたでしょう。
なぜそこまでして無意味な抵抗を続ける。貴方は何がしたいのだ、ラジエルモン。」
セラフィモンの問いかけが落ちた、まさにその時だった。
壁にもたれかかるラジエルモンの耳元の軍用無線機から、激しいノイズの隙間を縫って、途切れ途切れの通信音声が飛び込んできた。



12

『…ザ、ザザ……こちら、システム班……！鬼塚秋子氏による……ザザ……起動を確認…！』
最　初は雑音に埋もれた単語の断片しか聞き取れなかった。だが、数秒後、ノイズが晴れたスピーカーから、はっきりと作業完了を告げる技術者の声が届いた。
『対結晶壁用の分解ウイルスプログラム、全中継ノードへの送信および起動に成功しました!!』
　それを聞いた瞬間、血に汚れたラジエルモンの顔がゆっくりと持ち上がり、その口元だけが、ひどく綺麗な弧を描いて笑った。
　目の前の敗北者が浮かべた不敵な笑みに、セラフィモンがわずかに足を止め、問いへの答えを待つように目を細める。
　ラジエルモンは壁に背を預けたまま、黄金の瞳でセラフィモンを真っ直ぐに見返して答えた。
「…時間稼ぎですよ、セラフィモン。」
　その言葉が終わるか終わらないかのうちに、新宿の空を覆っていた重苦しい電子ノイズと、大気の異常な圧迫感に明確な変化が起きた。
　四谷のビル街から、日本列島の外周を取り囲む巨大な壁そのものを直接目視することはできない。だが、直後に飛び込んできた広域無線網からの報告が、起きた奇跡のすべてを伝えてきた。
『―外周観測班より緊急入電！東京湾岸および神奈川・埼玉方面の境界線に展開されていた巨大な結晶の壁に亀裂が発生！壁が崩壊していきます！外部との通信および通行ルートが回復しました!!』
　同じ時刻、新宿から遠く離れた県境や沿岸部の境界線では、空を覆い尽くしていた不気味なデジタル結晶の壁に無数の白い綻びが走っていた。
　これまで外から入ることしか許さず、内側からの脱出を完全に遮断していた絶対の檻。その光の面がガラス細工のように音を立ててひび割れ、輝くデータの結晶片となって空へとほどけ、消滅していく。
　壁の外側で立ち往生していた救援部隊と、内側の境界付近で怯えていた市民たちの双方が、目の前の見えない壁が消え去り、外へと続く道が開かれたことを目視で確認していた。
　かつてラジエルモンが防衛省の安所として収集・解析し、鬼塚秋子へと密かに託していた結晶壁の構造データ。
　秋子と製作所の技術者たちが、裏で必死に組み上げていた分解用のウイルスソフトを通信網へ流し込み、壁を維持していた天使側の基幹プログラムそのものを内側から書き換えて解除させたのだ。
　すでに人々の首に定着してしまったコンセクレイションリングがこれで消えたわけではないそれでも決して外へ逃げられないという最大の絶望の檻が破られたことで、各部隊の作戦は一気に封鎖外への長距離退避と外部からの救援受け入れへと切り替わった。
　西新宿では、先ほどの空中戦で崩落したビルの瓦礫道を警察と自衛隊が即座に情報共有し、大型の退避バスを別の開通ルートへと誘導していく。
　北新宿から落合方面では、ラジエルモンが光弾の軌道を逸らして守った神田川の橋を渡りきった市民たちを、待機していた別の誘導部隊が引き受けて安全な北の区境へと走らせる。
　高田馬場と早稲田方面では、前半にラジエルモンが千里眼で座標を伝えた倒壊マンションの瓦礫から救出された生存者たちが、次々と救急車両へと運び込まれていた。
　神楽坂の急な坂道では、足腰を痛めて動けなくなった老人を自衛隊員と一般の若者が両脇から抱え上げ、肩を並べて坂の上へと登っていく。
そしてここ四谷でも、撃ち落とされた瓦礫で塞がれていた大通りの片側車線が重機によってこじ開けられ、紋十郎や竜崎たち重傷者を乗せた車両の移送が再び動き始めていた。
　ラジエルモンが自らの身を削りながら各街区を飛び回り、伝え続けた情報の一つ一つが、確実に地上の人間たちの手で救出と生存の道へと変えられていた。千里眼の視界の端でその無数の小さな灯火を確認しながら、ラジエルモンは静かに息を吐いた。



13

さらに離れた避難ルートの一角では、リングを持たない市民の集団へ背後から襲いかかろうとしていたデジモンの小隊を、電脳犯罪捜査課の丁と明智秀人がいち早く発見して立ち塞がっていた。

「やぁ、そっちは通行止めよ、お兄さんたち！」

「…。」

丁の飄々とした掛け声とともに、相棒のデクスドルグレモンが重厚な金属の巨体で横合いから突進し、天使たちの進路を強引に塞ぎ込む。同時に、寡黙な明智の指示を受けたギロモンがチェーンソーを唸らせて宙を舞い、降り注ぐ落下物と敵の射線から市民たちを引き離して安全圏へと押し出した。

（引き抜けそうなのが２人も見つかったんだ、ここはいい恰好見せ…いやそういうのは今はいいかな。）

「全力で止めさせてもうらよ!!」

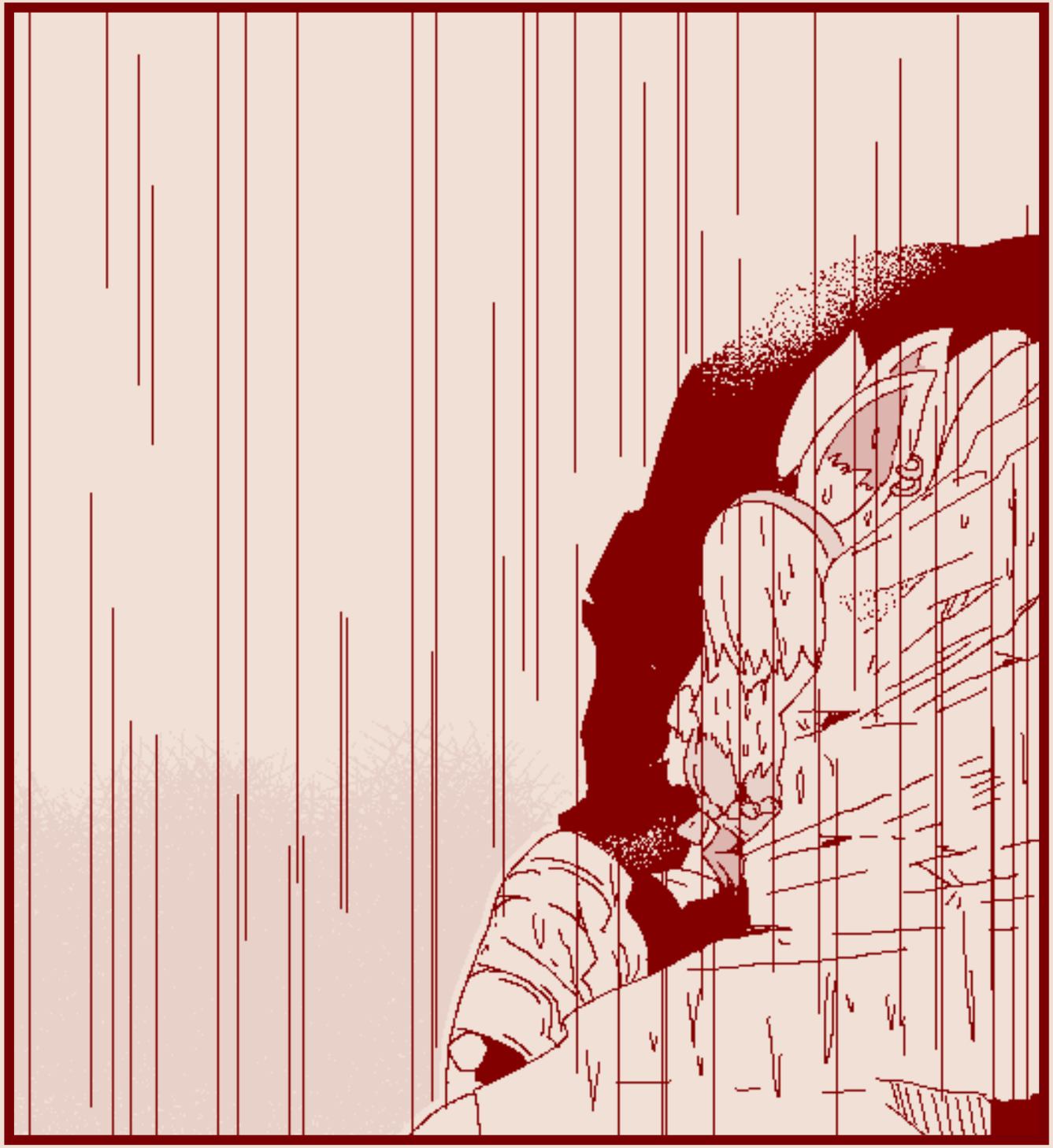
その後方では、秋子と製作所の面々とが、改造トラクターと車両をフル稼働させ、自力では歩けない負傷者や子供たちを次々と荷台へと運び込んでいる。

警察官が必死に避難者の人数を数え、自衛隊員が声を嗄らして車両の誘導路を確保し、先に乗り込んだ市民が後から運ばれてきた見知らぬ負傷者の手を引っ張り上げる。

つい数日前まで、セラフィモンの巧みな情報工作によって互いのクーデターを疑い、銃口を向け合っていたはずの警察と自衛隊が、今は泥と雨にまみれながら無線と役割を共有し、ただ目の前の命を生かすためだけに一丸となって動いていた。

壁が消えても天使たちの追撃は止まらないし、支配された人々の問題も山積みだ。それでも、負傷者を運ぶ者、身体を張って敵を抑える者、瓦礫を退けて道を開く者

誰一人として足を止めず、それぞれの場所で自ら選んだ役割を全うし続けていた。その光景のすべてが、ラジエルモンの千里眼の網膜に鮮やかに焼き付いていた。



14

「…見えていますか、セラフィモン」
　ひび割れた壁に背を預けたまま、ラジエルモンは静かに顔を上げ、目の前の熾天使へと語りかけた。
「貴方がどれほど精巧な罠を張り、恐怖で縛り付けようとしても…人間は、貴方が計算した通りには動きません。確かに彼らは愚かな争いも起こすし、取り返しのつかない間違いも犯す。
　けれど、こんな極限の地獄の中でさえ、誰に命じられるでもなく、目の前の見知らぬ誰かを助けるために自分から手を伸ばすことができるのです」
　ラジエルモンの脳裏に、自分の正体が異形のデジモンだと知った後でさえ、迷わず銃を握って戻ってきてくれた部下たちの泥だらけの顔が浮かぶ。あの行動だけは、上官としての命令や損得の計算では決して説明がつかないものだった。
　自分の力ではセラフィモンを倒しきれなかった悔しさを噛み締めながらも、ラジエルモンは彼らが証明してみせた人間性の輝きを、誇りをもって言葉にした。
　だが、それを受け止めるセラフィモンの黄金の仮面は、ピクリとも動かなかった。
「…危機という非日常の興奮の中で、一時的な善意に酔っているだけに過ぎませんよ。
　貴方だってそういった光景は幾らでも見てきたでしょう？」
　セラフィモンの声は、どこまでも冷たく、揺るぎなかった。封鎖壁が破られた事実を認めてもなお、人類の自由意志がやがて破局を招くという彼の根源的な思想が揺らぐことはない。
「…ふふ、相変わらず口が減りませんね。」
　セラフィモンはふと首を巡らせ、攻防の切れ目に自らの高次の視覚―遠見の力を、はるか西に聳える東京都庁の内部へと向けた。
「…貴方とケルビモンがそこまでの希望を託した、あの少年…。」
　セラフィモンは視線をラジエルモンへと戻し、静かに、しかし最も残酷な事実を突きつけるように告げた。
「見えているのでしょう？貴方が決して屈しないと豪語した日野 勇太の心は、内側から壊れかけています。…自由意志などという曖昧なものを子供に背負わせたのがあの醜い結果だ。」
「…はは…本当に学びませんねセラフィモン…今、どれほど深く傷つき、迷いの中に堕ちていたとしても…あの子は、そこで終わる人間ではありません。必ず自分の足で立ち止まりますよ。」
「根拠はあるのですか？」
「さぁ？幾ら我々天使でも全てを見通す事はできない…だから祈りだけある。」
（そう…ここが正念場です。日野 勇太…貴方もまた友のように…デーモンのように怒りに堕ちるのか。それとも…。）
「私はただ祈っています。…貴方もデーモンも忘れた…私も忘れていた…きっとずっと祈ってきたのはケルビモンだけだった。」
「…何を言っているのですか？」
「私は祈っています…彼が再び立ち上がり歩み始めるのを。」
「…。」



15

　時間はほんの数分だけ遡る。
　カオスドラモンの全方位レーザーによって天井と壁面を吹き飛ばされた東京都庁第一本庁舎のロビーには、冷たい氷雨が滝のように降り注いでいた。
　慎平を庇って右胸を貫かれ、砕け散った D-3 の破片と自らの鮮血の海の中にうつ伏せに倒れ込んだ勇太の元へ、渡辺直人がダスクモンの魔剣を舐め上げながら一歩ずつ近づいていく。
　その時だった。
　微かな音が鳴り、血だまりに沈んでいた勇太の小さな背中から、翡翠色と青白さが混ざり合った異様な光のラインが浮かび上がった。
　その光は血管や神経網をなぞるように勇太の四肢から首筋へと急速に広がり、まるでフェアリモンの装甲の輪郭を人間の皮膚へ直接焼き付けるかのような紋様を描き出していく。
　直後、吹き抜けの天井から降り注いでいた無数の雨粒が、ロビーの床へ届く寸前で重力を拒絶したかのようにピタリと静止し、次の瞬間には勇太の身体を中心にして猛烈な速度で逆巻き始めた。
　ただの風ではない。空気の塊そのものが凶器となって渦を巻く異常な暴風雨が、倒れた勇太の周囲に巨大な風の檻を形成する。
「…あ？ なんだ、この風は……!?」
　トドメを刺そうと歩み寄っていた直人が、顔を叩く猛烈な風圧に思わず足を止めて見据えた。
　離れた瓦礫の山の中で、全身を焼かれて動けずにいた慎平もまた、その尋常ではない大気の咆哮に顔を上げ、暴風の中心にいる勇太の異変に目を見開いた。東の空で響いていた究極体同士の激突音とは明らかに異質な、冷たく荒れ狂う風の胎動が地面を震わせていた。



16

暴風雨の中心で、うつ伏せに倒れていた勇太の身体が、まるで目に見えない糸で吊り上げられるかのようにゆっくりと立ち上がった。

右上腕は鉄筋に貫かれ、左膝は砕かれ、右胸には向こう側が透けるほどの風穴が穿たれている。本来ならば、とっくに絶命していておかしくない致命傷だった。

だが、限界を超えて傷ついた肉体と、自分の手で実験体の子供たちを切り裂いてしまった耐えがたい精神の崩壊が引き金となり、砕けた D-3 から溢れ出した風のスピリットのデータ…なにより怒りとも悲しみ、絶望とも形容できず無軌道に膨れた感情が制御のタガを外して勇太の生身の肉体そのものを強引にデジモンに変質させ、暴走を開始していたのだ。

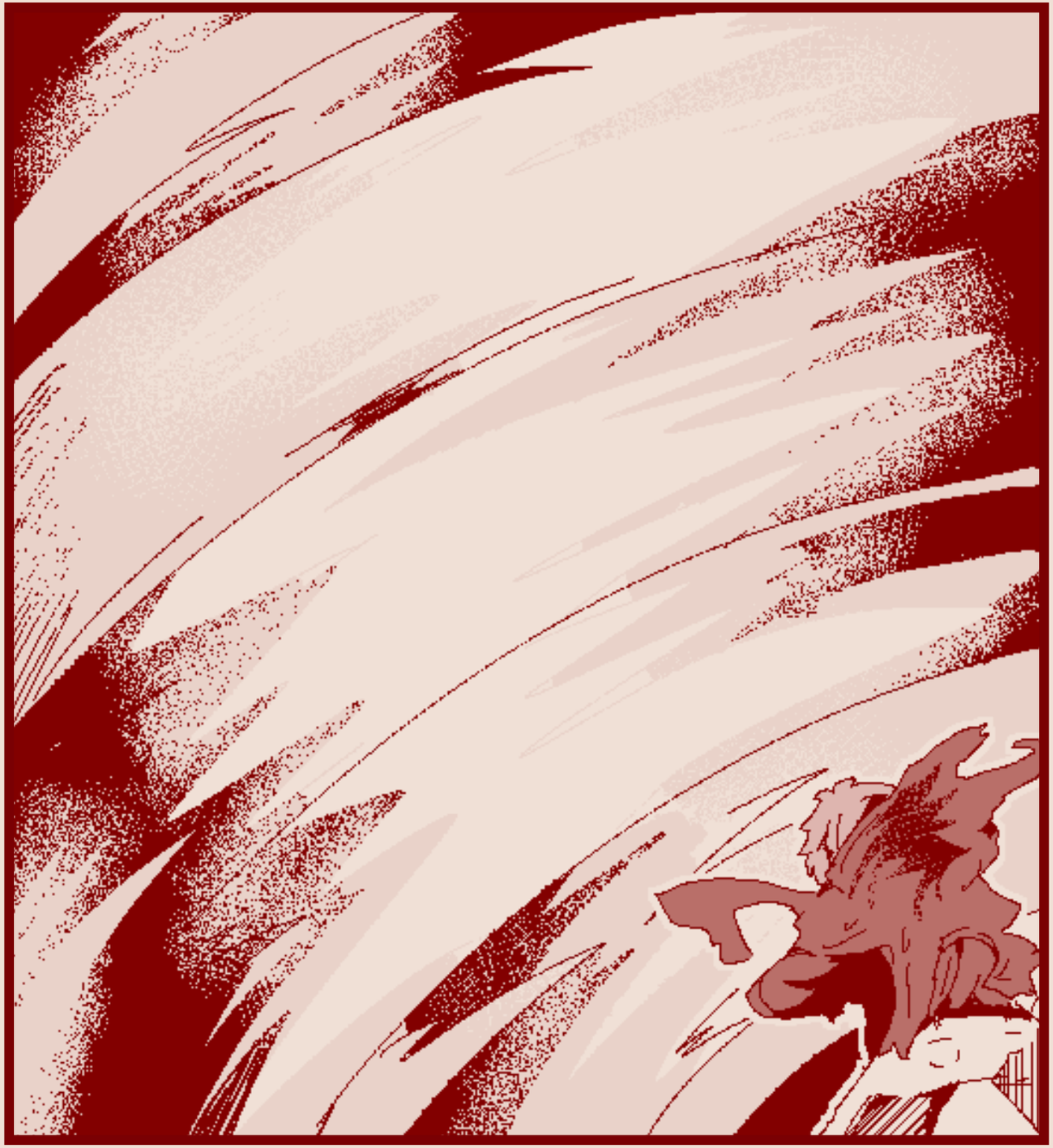
うつむいていた勇太が、ガクリと首をもたげて顔を上げた。
その両頬から額にかけても、冷たい電子基板の回路図のような青白い光のラインが幾筋も走り、不規則に明滅している。

「…ハァッ、ハァッ、ハァッ…！」

肺の穴から空気と血の泡が漏れる荒い呼吸音。だが、見開かれたその瞳には理性の光がなく、ただ目の前に立つ渡辺と、その背後の深紅の巨獣カオスドラモンの姿だけを、排除すべき標的として機械的に焼き付けていた。

「おい、勇太……!? やめろ、その身体で動くのは無理だ、勇太ァッ!!」

瓦礫の上から慎平が必死に声を張り上げて呼びかけるが、勇太の耳はその声を完全にノイズとして遮断し、ピクリとも反応を示さない。足元の水溜まりには、粉々に砕け散った D-3 の破片が、主の暴走を止められないまま虚しく転がっていた。



17

人間であることを辞めかけた少年の、底冷えのする眼光に射抜かれ、直人の背筋に本能的な恐怖が走った。
「へ…へへガキが文字通りてめえから人間を辞めやがったか…やれ！カオスドラモン！ 所詮はヒューマンスピリットのハイブリット体！いや！そのなり損ないだだ!!究極体をどうこうできるはずもねえ!!!近づけるな、今すぐ粉々に吹き飛ばせッ!!」
渡辺が焦燥に駆られてヒステリックに叫び、カオスドラモンの脚元からその肩部装甲の上へと慌てて飛び乗った。
しかし、カオスドラモンが全身の砲門を再び勇太へ向けようとしたその瞬間、勇太が血塗れの左腕を無造作に振り上げた。
ロビーに渦巻いていた暴風雨が一気に膨張し、建物の柱や床のコンクリート塊、放置車両の残骸、そして滝のような雨水を丸ごと巻き込んだ超巨大な竜巻を起こし、カオスドラモンの巨体を下からすっぽりと呑み込んだのだ。
凄まじい風圧と高速回転する瓦礫の礫が深紅の装甲に絶え間なく叩きつけられ、数千トンの巨体の足元を揺るがしてセンサーの視界を完全に白濁させる。
「くそっ、なんだこの風は！ 撃て、どこでもいいから撃ちまくれェッ!!」
暴風に吹き飛ばされそうになりながら、直人は肩部装甲の手すりに必死にしがみつき、恐怖で裏返った声で怒鳴り散らした。



荒れ狂う竜巻の壁そのものを自らの足場とするように、勇太の小さな身体が風の渦の中へと飛び込んだ。

音速に近い速度で竜巻の内部を螺旋状に駆け上がり、視界を奪われて乱射されるカオスドラモンのレーザーの隙間を紙一重で擦り抜けながら、肩の上の直人とカオスドラモンの本体へ向けて休むことなく肉弾の連撃を叩き込んでいく。

デジモン化による暴走でリミッターが外れた勇太の蹴撃と拳は、これまでのフェアリモンの脚とは比較にならないほどの破壊力を帯びていた。

一撃ごとに圧縮された真空の刃が炸裂し、あらゆる物理攻撃を弾き返すはずだったカオスドラモンの深紅の重装甲の表面に、幾筋もの深い亀裂と削り痕が刻まれていく。

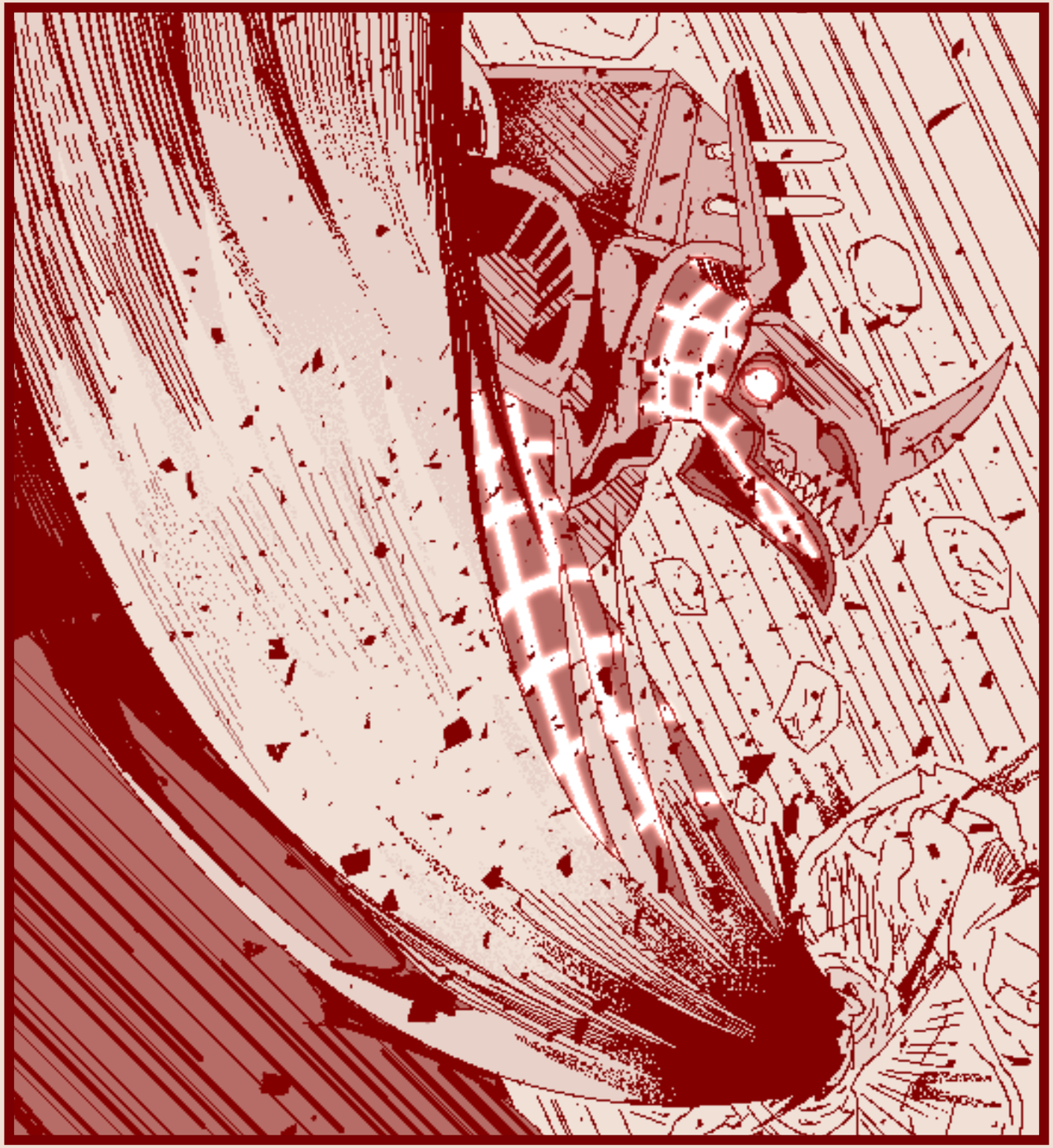
(クソ攻撃のベクトルがちげえ!?肉体じゃねえ風の操作能力を上げて風の…自然の破壊力でここまで!?)

だが、その攻撃はあまりにも歪で、痛々しかった。

カオスドラモンの超硬度の装甲を生身の拳や脛で殴りつけるたび、反作用で勇太自身の皮膚が裂け、骨が軋んで血飛沫が舞う。それにもかかわらず、勇太は自分の身体が受ける損傷に一顧だにせず、ただ目の前の敵を削り潰すためだけに、まるで自傷行為を繰り返すかのように突撃を止めない。

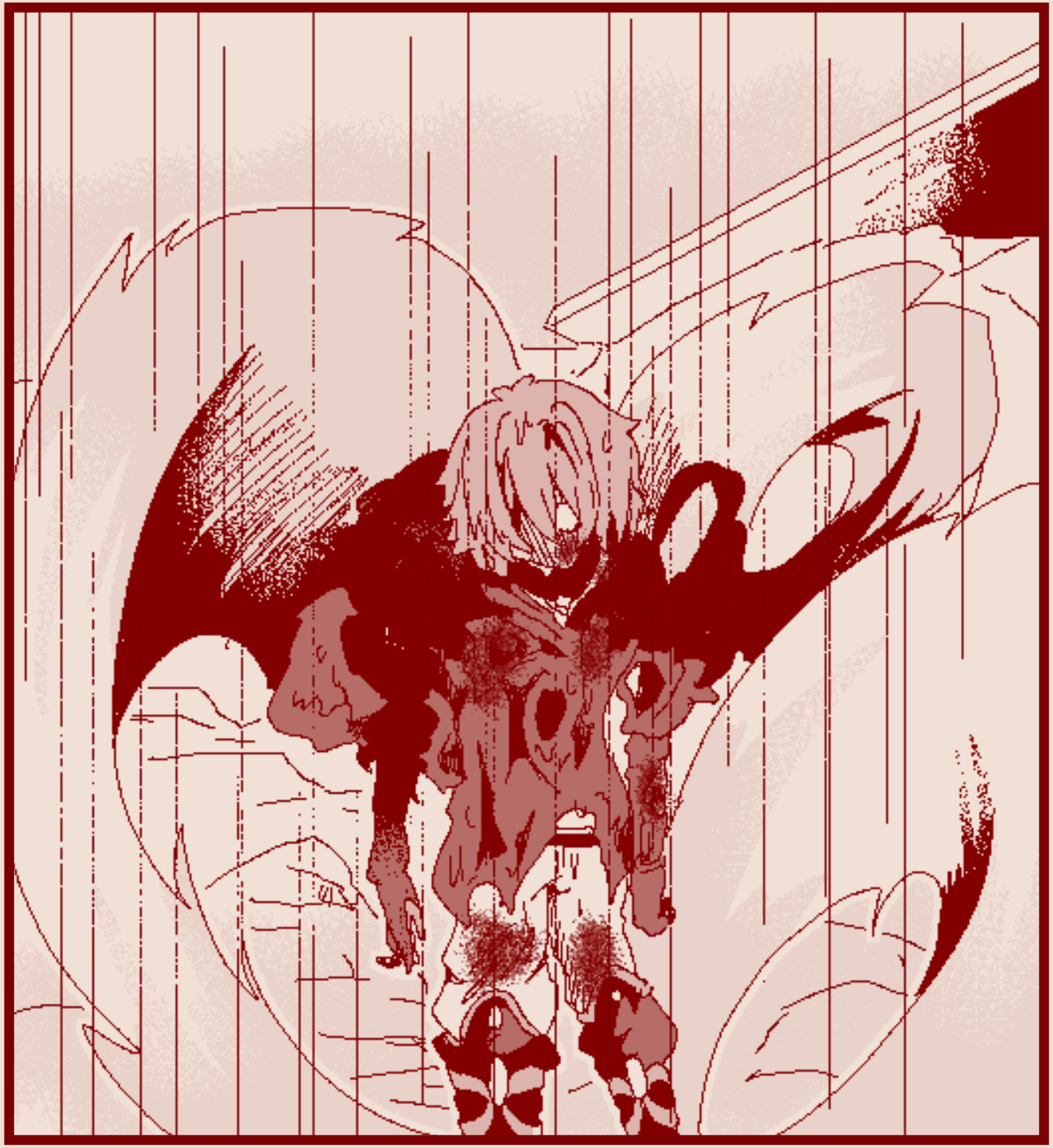
「…あいつ、自分の身体が壊れてんのに気づいてねえのか…!? このままじゃ、敵を倒す前にあいつ自身がバラバラになるぞ…！」

暴風の外側でその光景を見つめる慎平の顔が、かつてない恐怖と焦りに蒼白く染まっていった。



19

　終わりなき暴風の連撃の中、勇太が直人の首元を狙ってカオスドラモンの胸部正面から直線的に踏み込んだ、その一瞬の隙だった。
　渡辺の命を守ることを最優先プログラムとして刻み込まれたカオスドラモンが、装甲を削られるのを無視して強引に右腕を振り抜き、暴風の中で飛び込んできた勇太の小さな身体を、巨大な鋼鉄の掌で真正面から鷲掴みにしたのだ。
「――捕まえたぞ、クソガキがァッ!! そのまま握り潰して叩きつけろォッ!!」
　渡辺の狂喜の絶叫とともに、カオスドラモンの右腕の万力のような握力が勇太の全身の骨を軋ませ、そのままロビーの外壁の向こう…隣接する都庁議会棟の巨大なコンクリート壁面めがけて、全力の投擲で勇太の身体を叩きつけた。
「は…はは、そうだよ風の操作能力が上がっただけだ…所詮肉体の耐久力はハイブリット体程度!!!」
　人間一人の質量とは思えないほどの衝撃音が轟き、議会棟の分厚い外壁がクレーター状に深くへこんで、大量のコンクリート片とガラスが雨の中へと崩れ落ちた。
主の激突とともに、カオスドラモンを包んでいた巨大な竜巻の渦が一度大きく乱れ、霧散しかける。
「勇太ァッ!!」
　慎平が喉から血が出るほどの大声でその名を叫んだ。



28

　壁面のクレーターから、瓦礫と一緒に勇太の身体がアスファルトの上へと転がり落ちた。
　今の激突で、勇太の左手の指は不自然な方向へ折れ曲がり、肩や脚の関節も外れ、全身の骨が砕けていた。
しかし…無機質で気味の悪い音が勇太の体内から響いた。
　顔や四肢に走る青白い電子基板のラインが激しく発光したかと思うと、折れ曲がっていた指の骨が勝手に元の位置へと組み直され、外れた関節と裂けた筋肉が、光の粒子で縫い合わされるようにして瞬時に強制修復されていったのだ。
　デジモン化した肉体による、異常なまでの超速治癒。
　だが、肉体の破損がデータとして無理やり埋め合わされても、骨が砕けた瞬間の激痛も、自分の手で幼い子供たちを殺してしまったどす黒い罪悪感も、そして渡辺への沸騰するような怒りも、何一つとして消えてはいなかった。ただ「死ぬことすら許されず、傷つくたびに何度でも戦場へ立たされる」という生き地獄だけがそこにあった。
　勇太は血の混じった息を吐き出しながら、修復されたばかりの脚で再び濡れたアスファルトを踏み抜いた。
　背後から叫ぶ慎平の「止まれ、勇太！」という必死の声と、つい数分前に自分の足元で血を流して死んでいった子供たちの『助けて』『殺して』という掠れた泣き声が、勇太の擦り切れた脳内でぐちゃぐちゃに混ざり合い、耳鳴りのように反響し続ける。
　そのすべての声を振り切るように、勇太は再び暴風を纏ってカオスドラモンの巨体へと真っ直ぐに跳躍しようとした。



21

勇太が跳躍し、カオスドラモンが振り上げた深紅の爪と、突撃する勇太の身体が交錯しようとした…まさにその一歩手前の刹那だった。

フッと勇太の鼓膜を支配していた暴風の轟音も、渡辺の罵声も、慎平の叫び声も、すべての音がまるで深い水底へ沈んだかのように急速に遠のいていった。

気づけば、周囲の景色が一変していた。

空から落ちる無数の雨粒も、宙を舞うコンクリートの破片も、まるで時間が完全に停止したかのように空中でピタリと静止している。

荒い息を吐いていた勇太が、呆然と足を止めて周囲を見回す。

すると、静止した空間のすぐ正面に、ひとりの美しい人影がふわりと舞い降りてきた。透き通るような蝶の翅を背に広げ、薄紫と白銀の軽やかな装甲を纏った、風のスピリットの真の姿フェアリモンだった。

これまで勇太に脚の力だけを貸し与え続けてきた彼女が、初めてひとりの独立した人格を持つ存在として、傷つき壊れかけた 12 歳の少年の目の前に静かに立ち、その穏やかな瞳で勇太を真っ直ぐに見つめていた。